

東アジアの儒教——二十一世紀の思想史研究——

大会実行委員会

日本思想史学会のシンポジウムで、はじめて「日本」を越えて、国際シンポジウムが開かれることになりました。この十年程の間に、日本・中国・韓国の学术交流は飛躍的に進み、三国の研究者によるシンポジウムは日常的な光景になりましたが、日本思想史学会の大会シンポジウムにおいて、それが開催されることの意義は小さくない、と考えます。

本シンポジウムは、「儒教」を主題に掲げています。津田左右吉を挙げるまでもなく、儒教は外来思想であり、多彩な日本思想史の一分野にすぎません。しかし、それは逆に、「儒教」という視座が、日本思想史を私たちが総体として対象化するのに有効であることを示しています。「儒教」は東アジア思想史の共通言語として存在しました。その東アジア世界の中にあつて、日本思想史が如何なる位置にあるのかを検証するのに、「東アジアの儒教」は、真つ先に取り上げられるべきテーマであるに違いありません。

また、本シンポジウムという「儒教」は、いわゆる新儒教に限定されていません。つまり近世思想史です。丸山真男は江戸期における新儒教の解体に、日本における近代的思惟の形成を描きました。江戸期の思想史を近代の前提として把える、いわゆる「近代化」論には異論もありますが、江戸期が近代に直接に接する前近代最

後の時代であること、そして儒教が世俗の学問（実学）であったことは、江戸期の儒教（新儒教）を近代との関わりで把える物理的な条件を与えていると言えます。しかし、ここで看過しえないのは、日本思想史という学問が、近代の時代性を殊更に強くおびて成立展開した学問であった、という点です。津田左右吉が日本思想史における儒教非本質論を唱えたのは、儒教を国民（臣民）道徳として宣揚する潮流に異を唱えたのであり、戦後の丸山思想史の根底にあったのがフアシズムを許さない市民社会の希求であったことは、言うまでもありません。今日、儒教（新儒教）を語ることは、私たちが育んできた日本思想史という学問の再吟味、すなわち二十世紀の学知を把え返すことに他なりません。それが、本シンポジウムの副題に「二十一世紀の思想史研究」と掲げた所以です。

ところで、津田や丸山の思想史もまた「国民思想」の追求という点で「二十世紀の思想史研究」という特徴を明確に示しています。このような「日本思想」史においては、儒教は「シナ思想」、封建的思惟の原像といった、固定的な姿で提示されます。これは「西洋思想」なる理念型を前提に「日本思想」の特殊性を論じる論法と変わりません。しかし日本思想史の枠外にあっても、朝鮮でも、そして「本家」の中国でも、儒教が各々に展開していったのは勿論です。ここに、我々が海外から学者をお招きして国際シンポジウムを開く理由があります。しかし、再度注意しなければならないのは、中国思想史も韓国思想史も、私たちの日本思想史と同じく、否、より強烈に「二十世紀の思想史研究」として構成されている、という点です。本シンポジウムは、各国の学者が自国の「国学」を競う場ではありません。各報告は、二十世紀を経由して現在に至る各国の儒学的伝統と、それに応じた研究の現在を示しています。それを相互に共有することにより、ナショナルな枠をこえた「東アジアの儒教」の全体像が、模索されうるのだと信じます。

なお、儒教の比較研究を可能にするために、かつて溝口雄三氏は、儒教を哲学から社会習俗に至る幾つかの аспекトに分けて分析する事を提起しました。本シンポジウムは、どのアスペクトがどのように重視されて語られるのかという形で、それに答えることになるでしょう。以上が、「東アジアの儒教——二十一世紀の思想史研究」というテーマ設定の趣旨です。活発な議論をお願いいたします。